

## 「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	東京外国語大学	拠点番号	E 0 4
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	史資料ハブ地域文化研究拠点 [Centre for Documentation & Area-Transcultural Studies(C-DATS)]		
研究分野及びキーワード	<研究分野:地域研究>(地域文化)(アジア)(史資料)(臨地研究)(情報化)		
専攻等名	大学院地域文化研究科地域文化専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 藤井 毅 教授 他 17名		

### 拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成16年1月現在）を抜粋

<p>&lt;本拠点がカバーする学問分野について&gt;</p>	<p>本拠点の事業分担者は、歴史学・経済学・社会学・文化人類学・哲学・国際関係論を専門とする。これらの研究者と図書館・文書館関係者が連携し、領域横断的かつ学際的な近現代アジア・アフリカ地域研究を推進している。</p>
<p>&lt;本拠点の特色及びその目的等&gt;</p>	<p>本拠点の目的とその特色は、本学が保有するアジア・アフリカ地域研究に関わる豊かな物的・人的資源を有機的に組織し、アジア・アフリカ近代諸語で書かれた史資料に特化させた史資料センターを構築し、現地と協働して非収奪型の史資料収集を行い、従来、看過されてきた在地固有文書・オーラル・表象文化資料を発掘するとともに、海外の所蔵機関や現地との連携のもと、その保存・情報化・共有事業を推進することである。最終的には、本邦においては未だ存在していない、アジア太平洋地域における基幹的史資料ハブの構築を目指し、その基盤に依拠して地域文化の生成とグローバル化による変容を解明する21世紀に相応しい新たな地域文化研究を創成する。同時に、アジア・アフリカ近代諸語資料に関する深い知識と豊かな臨地体験に裏打ちされ、これらの課題を担いうる人材を育成する。</p>
<p>&lt;COEを目指すユニーク性&gt;</p>	<p>欧米にはアジア・アフリカ近代諸語資料の収集・保存・情報化を担う中核機関が存在するだけでなく、相互にネットワークを形成し、その基盤の上に立って地域研究が推進されている。しかしながら、本邦ではそうした連携やそれを担う機関の整備は大きく立ち後れている。本拠点はこのような欠落を補う役割を果たすものである。それと同時に、植民地支配という歴史的背景の上に築かれた欧米の史資料・研究状況とは異なった次元から、現地との協力のもと、史資料保有国の立場と観点を取り入れつつ、周縁化され消滅の危機に瀕する史資料の非収奪型保存・共有事業を推進する。アジア・アフリカにおいては書かれた史料を持たない人々、あるいは文字文化の中に置かれながら文字を持たない人々が多数暮らしている。そうした人々の歴史と状況をとらえるために、文字史料に留まらず、オーラル・表象文化資料など様々な形態の史資料を収集、保存し、そうした多様な史資料群を操作するための方法論(アジア・アフリカ史資料学)を確立しながら、その基盤の上に立って21世紀の時代的要請に応えた新たなタイプの地域文化研究を推進していく。</p>
<p>&lt;本拠点のCOEとしての重要性・発展性&gt;</p>	<p>地球的規模で多民族、多言語状況が進行し、従来自明の前提とされてきた地域や国家の境界がとめどなく流動化していく21世紀にあって、このような事態の解明に取り組む地域文化研究の意義はきわめて大きい。こうした課題を担う本拠点の活動を、プログラム事業終了後に継承、発展させていくために、「地球社会先端教育研究センター」(仮称)を創設する。同センターを擁する本学は、わが国におけるアジア・アフリカ地域研究総体を支える拠点となる。</p>
<p>&lt;本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果&gt;</p>	<p>研究面での成果として、第一に、卓越した史資料基盤が構築され、あわせて研究対象地域を含む国内外の史資料所蔵・研究機関との連携が達成される。第二に、研究班の研究事業において、公文書のみならずこれまでのような国家単位の研究ではなく、看過され周縁化された史資料にも目を向け、「研究される側」の観点をも取り入れた新たなアジア・アフリカ史資料学と、それに基づき地域文化の生成とグローバル化による変容を解明する地域文化研究が創成される。</p> <p>教育面での成果として、高度の多言語能力と領域横断性・学際性を身につけ、豊かな臨地体験を有する研究者が養成されてゆく。</p>
<p>&lt;背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等&gt;</p>	<p>欧米における地域研究はディシプリンにおいては学際的であるものの、地域横断的ではない。また公文書への偏りが見られる。一方、我が国における地域研究は、ネットワーク型、共有型の史資料的基盤を欠いている。本拠点における事業の結果、第一に、本邦で欠落している史資料の収集・保存・情報化・共有のための拠点が確立され、研究者コミュニティと社会に開かれた研究環境が創出される。第二に、アジア・アフリカ史資料学と新しい地域文化研究が構築されることで、無文字文化を生きる人々、あるいは、戦争や紛争により歴史資料を奪われた人々が多数生きているこの地球社会を理解する手がかりが獲得される。第三に、高い専門性と多言語能力、ならびに豊かな臨地体験を身につけた研究者と高度専門職業人を育成し、多様な人々の暮らす地球社会が直面する課題を解明しうる人材を社会に送り出す。さらに、消滅の危機に瀕する史資料を、収奪型ではなく当該地域との協力のもとで保存・共有しようとする努力は、21世紀における国際協力と学問研究成果の社会還元のための新たなモデルを社会に提供することとなる。</p>

機 関 名	東京外国語大学	拠点番号	E 0 4
拠点のプログラム名称	史資料ハブ地域文化研究拠点		

#### 21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と評価される。

(コメント)

本プログラムは、当初の計画に沿って着実に進められ、期間内に成果が上がる事が期待できる。とくに、消滅の危機に瀕する史資料を、当該地域との協力のもとにおいて保存・共有する調査研究の進行は、重要である。また将来的にも、幅広い裾野をもった研究拠点として、持続的な発展が期待できる。

敢えて言えば、資料収集した国や地域の研究者だけではなく、一般住民への成果の還元などについても、今後いっそうの努力を払われることを希望する。